

[成果情報名] ビワ豊産性品種「涼風」「陽玉」の施設栽培における栽培特性

[要約] 「涼風」は、結果枝の節間が詰まり短くわい性の傾向を示し、新しょうが1㎡当たり約24本で、着房率が連年90%と高く10a 当たり換算収量は約1.7 tである。「陽玉」は、着果を繰り返すと結果枝の節間が詰まり短くなり、新しょうが1㎡当たり約26本で、着房率も比較的高く安定しており、10a 当たり換算収量は約2.0 tである。

[キーワード] 「涼風」、結果枝、新しょう、着房率、収量、「陽玉」

[担当] 長崎果樹試・常緑果樹科

[連絡先] 0957-55-8740、電子メール takami@pref.nagasaki.lg.jp

[区分] 九州沖縄農業・果樹

[分類] 指導

[背景・ねらい]

ビワ新品種「涼風」「陽玉」の施設栽培の早期普及を図るため、施設栽培における樹体構成と収量の推移を明らかにし、栽培特性を解明することで早期多収技術の確立に資する。

[成果の内容・特徴]

1. 「涼風」は、1樹当たり収量が4か年で2倍に増え、2002年の10a 当たり換算収量は1673kg と「茂木」に比べ27%多い(図1、2)。「陽玉」は、1樹当たり収量が4か年で3倍に増え、2002年の10a 当たり換算収量は2016kg と「茂木」に比べ53%多い(図1、2)。
2. 樹冠占有面積当たり枝数は、品種間に差がなく、2002年は樹冠占有面積1㎡当たり23~25本である(図3)。
3. 「涼風」の着房率は連年著しく高く安定している(図4)。「陽玉」の着房率は75~93%の間でやや変動しているが、収量への影響は少ない。
4. 果こん枝を中心とした結果枝の形質は、「涼風」は、節間が短く枝は短い、「陽玉」は、着果始めは節間が長く長大な枝であるが、着果を繰り返すと「涼風」と同様にコンパクトな枝の形質になる。

[成果の活用面・留意点]

1. 供試樹の管理としては、樹高が3mの2段盃状形を収穫後に垂主枝、側枝を誘引する等、「茂木」と同等の通常管理を行う。
2. 「涼風」「陽玉」とも1996年に8年生の「福原早生」に高接ぎした樹を供試したので、苗から育成した場合と異なるので留意する。
3. 「涼風」「陽玉」とも連年収量が多いため、果実がやや小さくなる傾向にあり、施肥量の検討が必要である。
4. 10a 当たり換算数量は、樹冠占有面積当たり収量に樹冠占有率を80%として換算した。

[具体的デ - タ]

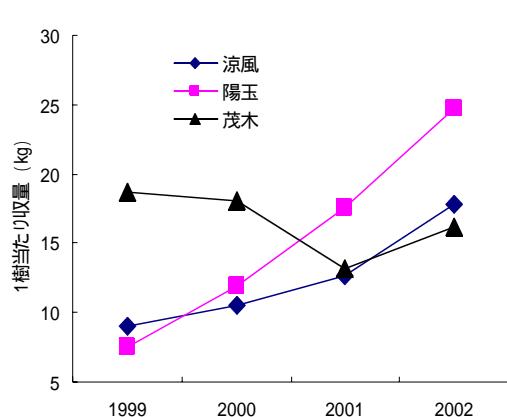


図1 1樹当たり収量の推移

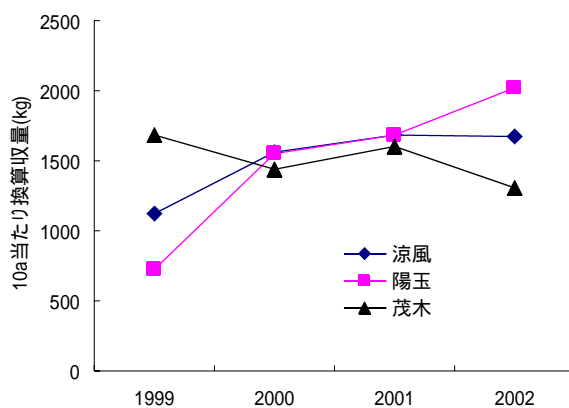


図2 10a 当たり換算収量の推移

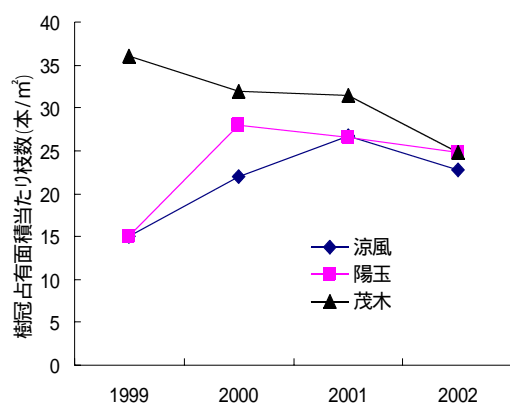


図3 樹冠占有面積当たり枝数の推移

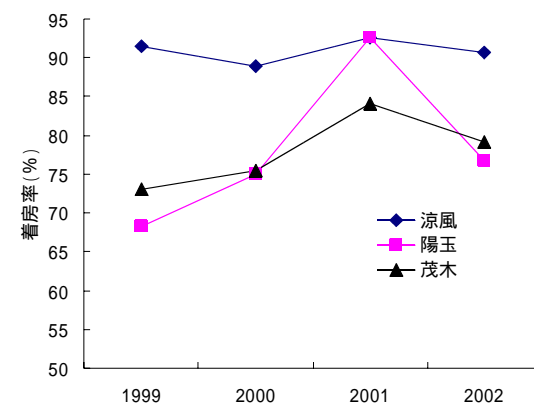


図4 着房率の推移

表1 結果枝の形質

品 種	枝 長			基部径			着葉数		
	2000	2001	2002	2000	2001	2002	2000	2001	2002
	(cm)			(mm)			(枚)		
涼 風	18.0	15.2	12.7	11.5	10.1	10.0	16.5	15.5	15.8
陽 玉	30.7	14.5	12.3	11.2	10.3	9.8	13.9	12.8	14.3
茂 木	14.7	12.6	11.3	10.5	10.1	9.7	17.2	16.4	12.8

[その他]

研究課題名：新品種「涼風」「陽玉」の栽培技術の確立

予算区分：県単

研究期間：平成14年度（平11～15）

研究担当者：高見寿隆、山下義昭

発表論文等：なし